

2021. 1. 17

今年もまた、『あの日』がやってきます。阪神淡路大震災から17日で26年。長い時間が経ったことが信じられません。みなさんにとっては生まれる前の出来事で、本当に起こったことと思えないかもしれません。しかし、現実でした。『あの日を忘れない！伝える！活かす！備える！』ことを心に決めて、今、私はここに立っています。地震を経験した人としなかった人。分かり合うには相当の想像する力がいます。2年半前の大阪北部地震のことを思い出し、想像する力を働かせながら聴いてください。

「ただ見つめるしかありませんでした」

阪神淡路大震災が起こった5時46分は、兵庫県西宮市で、家族5人が枕を並べて寝ている時でした。真っ暗な闇の中で、突然、ドッスンという下から突き上げられる衝撃がきました。飛行機が落ちたのか？ガス爆発か？と思っていると、大きな横揺れが続き、家中の家具が大きな音をたてて倒れ落ちました。経験したことのない揺れの中で、声を出すこともできず、側に寝ている子どもを引き寄せるのが精いっぱいでした。ほんの20秒ほどの時間だったそうですが、私にはものすごく長く怖い時間でした。

家は柱が傾き、壁が剥がれ落ち、二階がグサグサと揺れるような「半壊」の状態になっていましたが、つぶれなかったおかげで私たち家族は命を落とさずにすみました。後で聞くと、亡くなった方の80パーセントは、倒れた家や家具の下敷きになったそうです。家や家具が命を奪う凶器になるのです。家の耐震工事や家具の固定が命を守るにつながります。

揺れが収まり、布団から出ようとしても倒れた家具に埋まって身動きが取れません。ようやく抜け出し、まずしたことは靴を履くこと。布団の上も台所も玄関も、割れたガラスや食器や調味料まみれで、とても素足では歩けません。パジャマに上着をはおり、硬い玄関の扉を開けて外に出てみると、まだ暗くて・寒くて・静かだったことを覚えています。

少しずつ夜が明け、目に入ってきた景色に言葉を失いました。見慣れた自分の住む街が、崩れ落ちた瓦礫の街になっていたのです。つぶれた家々が道路をふさぎ、ブロック塀はペタペタと地面に倒れ、道路はひび割れたり盛り上がり、水が噴き出しているところもありました。

大きな屋根瓦の二階建ての家は、屋根の重みに耐えられず、一階を押しつぶして二階の屋根が地面にかぶさっていました。その屋根に上って、一階で寝ていたおばあさんを助けようとしている家族がいました。しばらくして毛布にくるまれたおばあさんを外に出し、トラックの荷台に乗せて運んでいきました。

近所の学生寮では、何人もの大学生が亡くなっていました。

こんなことが起きるなんて。これは夢ではないか、夢であってほしい…現実とは思えないことが目の前で起こっていました。

その日の夜は、怖くて家に居ることができず、子どもの通っている小学校の体育館に避難しました。すでにたくさんの方が避難していて、私達家族が使えるスペースは畳一枚分ほどで、体を伸ばすこともできません。前の晩から熱を出していた2歳の娘の熱いからだ、床の冷たさを感じながら、毛布にくるまって夜を明かしました。「何としてもこの子たちは守る」と心に誓っていました。

次の朝、近くのスーパーが開くらしいと聞き急いで行ってみると、シャッターがグニャリと曲がった入り口で店長さんが必死にこじ開けようとしているところでした。お客さんは順番に並んでお店が開くのを待ちまし

た。店長さんが「商品はこれで全部です。できるだけ多くの方に渡すよう1人2個までとします」と言われました。みんなおなかがすいていたし、家族の分もできるだけたくさんの食べ物を手に入れたいと必死の気持ちでいました。でも誰一人文句や苦情を言う人もなく、2個の商品を選び、お金を払って買いました。

それだけしかない食べ物を誰かだけがたくさん買ったり、割り込んだり、身勝手なことをすればたちまちそこは大パニックになり、われ先にと人が押し寄せケガ人がでるかもしれません。今、自分たちの置かれている状況は同じ、みんな苦しいのだと考え、みんなが我慢をしました。自分だけよければ…という気持ちがなかったとはいえませんが、みんなそんな気持ちと必死に闘い、冷静な行動をとりました。

社会というたくさんの人がいるところには必ず**ルール**があります。そのルールを守ることは、時には面倒で手間なことです。でも、大きな災害が起きたときそのルールによって食べ物を手にすることができ、生き延びることができるのです。日頃から自分の周りの決まりや、約束ごとを心に止めて、それを守る姿勢を身につけておくことは大切だと感じました。

今の暮らしは、スイッチ一つで灯りがともし、暖房が使える、蛇口から水でもお湯でも自由に使える。その『当たり前』な生活が突然できなくなることが想像できますか。夜になっても電気も点かず、食事も作れず、お風呂にも入れない。トイレは流れない……。どうやって生活すればよいのか。不安でいっぱいの数日間を、自分たちの力で乗り切るしかなかったギリギリの日々でした。

最後まで使えなかったのはガスでした。復旧に2か月以上かかりました。地面の下のガス管が壊れたり外れたりしていたので、修理は大変な工事でした。全国から駆けつけてくれたガス工事の方々が、朝早くから夜遅くまで、小雪がちらつく中、寝る間も惜しんで工事を続けてくださいました。トラックには「復旧作業車」とか「〇〇ガス応援隊」など全国の地名が書かれた幕がついていて、見かけるたびに、**感謝の気持ち**でいっぱいになりました。

寒い季節に温かいお風呂に入るのは本当に気持ちがいいです。しかし、ガスが止まりお風呂は使えません。仕事の帰りに正雀の銭湯へ寄ってから帰ることもありました。温まった体はすぐに冷えてしまうけれど、サッパリした気持ちになりました。ある時、尼崎に開いている銭湯があると聞いて車でってみました。灯りの点かない、崩れた家がかぶさった道の先に、そこだけ明るくあたたかな湯気が上がる建物が見え、人々の話声が聞こえています。そこが銭湯でした。みんなそれぞれに、大きな被害を受け、悲しみを抱え、不安な心を持ちながら、それでも今、こうしてあたたかなお風呂に入れることを本当に幸せだと感じている。ああここは天国だなあと感じました。

三人の子どもは実家の両親に預け、夫と私は西宮で生活しました。子どものいない生活は、体に力が入らず、フワフワ宙に浮いているような、なんだか生きている実感のない毎日でした。

そんな時期を何とか過ごせたのは、まわりの人との関わりでした。自分の居場所があって、私を待っていてくれる子どもたちや先生がいてくれた。また、今まで挨拶しかしたことのない近所の人たちとの支え合いでした。あるものは分け合い、手伝ったり助けられたり。お互いの身体をいたわりあったり、情報を交換したり。人から受ける親切と、自分が誰かの役に立つことで、自分が生きていることを実感でき、元気が出ました。先のことは考えないようにして、ただ今日一日を生きる。今日より少しだけよくなる明日を信じて、一日一日を生きていました。

26年前、6434人もの命が奪われた阪神淡路大震災の記憶が遠ざかっていきます。災害はいつ・どこで・どんなレベルで起こるかわかりません。誰かが何かしてくれるのを待つのではなく、大切なことは、自分で判断して命を守る行動を取ることです。この間も地震、津波、台風、水害など大きな自然災害が次々と起きました。30年以内には南海トラフ地震が高い確率で起きると言われています。こんな言葉を知っていますか？『あり得ることは起こる。あり得ないと思ふことも起こる』私たちの考えや予想をはるかに超える力が自然にはあります。これまでは大丈夫だったという体験は、これからも絶対大丈夫！という安心にはつながらないのです。

昨日「おやすみ」と言って布団に入った子どもが親が……。小さなケンカの仲直りができていないきょうだいが……。明日一緒に何かしようと約束していた親子が……。 「また明日」と手を振って別れた友だちが……。 さようならも言えずに、人生を終えなければならなかった。目が覚めたら、明日がくることは当たり前だと思っていたのに、明日がくることはなかった。そんな悲しい震災でした。当たり前で暮らせる毎日と、生きてさえいればなんだってできる。かけがえのないいのちを大切に、人とつながる勇気をもって、今日をしっかりと生きていきましょう。

最後に『しあわせ運べるように』を、聴いてください。

いつもの年のようにみなさんの顔を見て話をしたかったです。そして、一緒に歌いたかった。でも今年は仕方ないですね。長いお話になってしまいましたが、最後まで聞いてくれてありがとうございました。